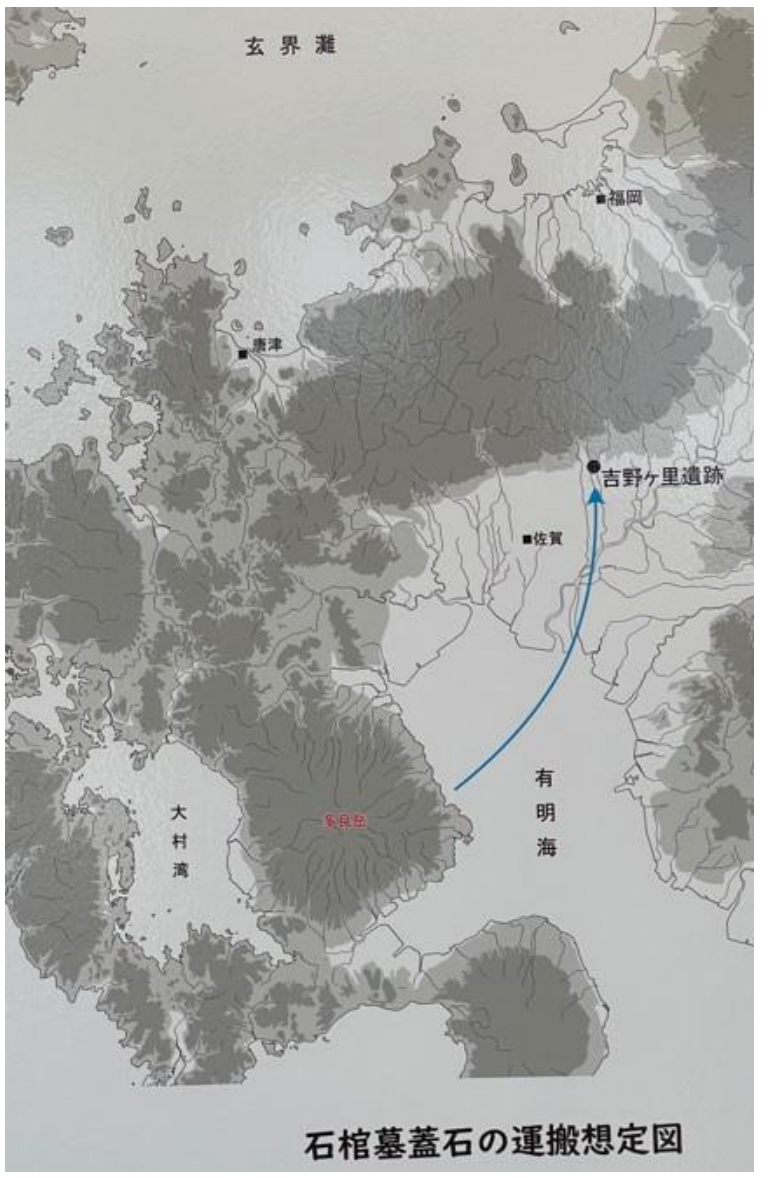
吉野ヶ里の石棺蓋（がい）考

約１８００年前の日本古代史は、紙の文献がないので、考古学という科学探査が主となる。その中でも岩石学は単に溶岩が固まったという分析ではなく、どこの火山で、どれ位の時間で凝固したのかも分かる。例えば、溶岩の急冷は黒曜石を生む。石刀の材料である。縄文時代、神津島の黒曜石は広く交易されていた。恐らく、関東に生活圏があった日高見国の民による交易があったろう。

吉野ヶ里は北部九州である。そこには魏志倭人伝に「鬼奴（ひぬ）國」と記された国があった。鬼奴國は邪馬台国の連合国の一つであったから、今の大分県までその影響下に治めていた邪馬台国を経由して、国東半島沖に浮かぶ、近場の「姫島」から黒曜石が手に入ったことだろう。因みに、筆者が現地を訪ねたところ、姫島の黒曜石は露出しており、採掘不要である。

吉野ヶ里の石棺の蓋は、最初は多久市に産出する岩石との説もあったが、結局、多良岳の安山岩と組成分が同じであることから、ここの岩石と比定された。多良岳の麓には亀ノ浦という所があり、今も採石場の跡がある。江戸時代の佐賀藩では、ここで産出した石は干拓事業の土木工事に使っていた。この石切場は有明海の海岸から８０メートルしか離れておらず、海進があった西暦２００年代の卑弥呼の時代は、まさに海岸である。

往時は陸路で岩石を運び出すのは難しい。従って、石棺の蓋は海岸近くにあった岩石と比定されたのだろう。そこには魏志倭人伝には書かれていない国があったのである。邪馬台国の小国連合に属してはいなかったかも知れないが、吉野ヶ里にあった鬼奴國とは同盟、ないしは交流があった漁民の国であろう。現在も蠣や竹崎蟹（渡り蟹）が採れる豊かな漁村である。



石棺墓蓋石の運搬想定図

亀ノ浦から有明海沿岸に沿って１５キロ北上すると、塩田川の河口に至る。更に直線距離で西に５キロ塩田川を遡った所に丹生（たんじょう）神社があり「朱丹を生む」山が現に在る。魏志倭人伝に「其山有丹」と記され、吉野ヶ里の石棺墓に塗られたというのが筆者の新説である。

令和六年五月十六日　大中臣正比呂　記